デリー暴動事件の顛末

新谷恭明

コルカタに着いたインドの初日だったか二日目だったか。携帯に学生からメールが入ってた。

「先生、インドに着いたっすか。デリーで暴動があったらしいっすよ。気をつけてください」

おお、これはまずい。早速、木村氏に伝える。

「へぇぇ」

と反応はしたものの、特に街中もテレビもホテルも何もない感じでのんびりしているので、すっかりそんなことは忘れてしまった。

後からインターネットで確認すると次のような話だったらしい。〈インドでカースト暴動、死者四人　スズキ系列は操業中止〉と題した記事で「インドの首都ニューデリー近郊で、特定のカーストの集団が、被差別カーストに与えられる公務員採用や大学入試などでの優先枠の割り当てを求めるデモを始めて暴徒化。二〇日までに少なくとも四人の死者が出たほか、道路の封鎖などで日系企業の操業にも影響が出ている。

ニューデリー近郊のハリヤナ州ロータクなどでデモを始めたのは「ジャート」と呼ばれる、伝統的に自作農とされるカースト。被差別カーストに対して与え

られる優先枠の割り当てを求め、道路や線路を封鎖。州政府は一九日、一帯に外出禁止令を出し、軍を派遣した。」
もっとも、そんな詳しいことは知るよしもないが、インドの抱えている社会問題も普通街を歩いているくらいではわからない。
それからインドの旅は始まった。コルカタからDOON EXPRESSで、ガヤへ。ブッダガヤで信仰心を深め、バラナシで敬虔な祈りを捧げ、バラナシからデリーに飛び、最後の二泊を過ごすというのが予定であった。デリーへの飛行機は順調であった。
デリーにはほぼ定刻に着く。ここから地下鉄で行く、というので〈METRO〉の看板の方に行くが、その文字が消え、シャトルバス乗り場に私たちは着いていた。木村氏がコーナーのカウンターにいる男に聞くとバスで地下鉄駅に向かうのだそうな。
「空港線が空港直結ではなくバスで行くんだと？」
納得しにくい話だが、成田でも同様のことを味わったから、まあ、そんなものなのだろう。バスはすぐきた。かなりの渋滞を越えて地下鉄の駅に着く。しかし、切符売り場がない。どうやら保安検査場を抜けてから買うらしい。
保安検査場をとおり、割り込む客に辟易しながら何とか切符を買ってホームに降りる。きれいな駅だフルにホームとレールがガラスの壁で分かたれていて、

電車がくると扉がスライドして開くという形式だ。
電車が入ってきて、扉が開き、電車のドアも開いた。デッキは非常に広い。広いのだが、そこに大量の荷物が足の踏み場もないくらいに投げ出されていてその山を越えるのがたいへん。何とかクリアして席に着いた。
わかりにくいだろうから繰り返そう。電車は超モダンな電車だ。全体に白のトーンだ。座席や通路もゆったりしている。座席は二人掛けが進行方向に向かって並ぶ形式のもの。ドアから入ると座席のない空間がかなりのスペースであり、それを先ほどデッキと書いた。デッキの両端には大きな荷物用の棚である。
で、繰り返そう。その棚には荷物は一つも置かれてなく、すべてがデッキ的空間に投げ出されて、山となっていたのだ。
電車がニューデリー駅に着いた。突然同じ車両に座っていた白装束の人たちが荷物に群がり、それらをホームに並べ始めたのだ。それもドアの幅いっぱいに、まるで乗降を絶つバリケードのようにだ。ドアの右端をブロックする荷物がまだ一個だったので、それを飛び越えて僕はかろうじてホームに降りることができた。
地下鉄空港線ニューデリー駅は他の地下鉄と繋がっていない。駅の反対側にロータリーを挟んで出口がある。出口を出た。木村氏が暗い空の先を指で指す。

「あれがニューデリー駅だ。さて、どうやって行こうか。僕らの泊まるホテルは駅の向こう側なんだ。」
僕は頭の中にあったニューデリーの地図を思い起こしていた。
〈駅を向こうに抜ければロータリーを超えて真ん中の通りを一〇分ほど行く〉
その地図に今観ている景観がおかれてリアリティが増していく。地図というメタ世界が現実世界に徐々に転換していく。
木村氏はしばし立ち止まったが、意を決したように歩き出した。「取り敢えず、こっちへ行くか。」
われわれは木村氏に従い、駅へ駅へと手探りするように近づいていったリクシャの群れをかいくぐると駅舎の前についた。大きな駅だ。僕たちはその向かって右端のほうにいた。そこに右側の上っていく階段がある。
「これを上がれば向こう側に抜けられるはずだ。」
僕らはちょっとだけ躊躇ったところで、その階段を上ろうとした。その時である。
「そっちはダメ。行けませんよ」
若い男が声をかけてきた。木村氏は一端無視してそのまま行こうとする。
「ダメダメ、そっちはNo Entryだから」
見ると確かに〈No Entry〉プレートが見える。僕らはまずは駅舎内に入ることにした。駅舎内は広々した空間となっていた。人もそこそこに賑わってはいた。そしてやはり右側に上っていく階段があったのでそちらが連絡通路だろうと目星をつけその階段からいくことにした。

五頁

階段を中程まで上ったとき、先ほどの若い男が飛んできた。
「ダメダメ、そっちじゃないです。そっちは閉鎖されてますよ。向こうに行かなくちゃ」
男は向かって左側の方を指し示す。
「どこだい？」
駅舎の向かって左端のほうを見ると遠くに階段らしきものが見える。
「あっちから行けということかな。」
「いや、これでいいはずだが…」
木村氏の疲れた脳はぷりぷりと音を立てて判断をしようとしていた。そして再び階段を上ろうとすると、先ほどの若い男が制止する。
「そっちは閉鎖されているので行っても無駄だから、あっちね」
やむをえず、われわれは彼の指示通りに駅舎の中を移動することにした。右側には改札口があり、そこにも保安検査場があって、銃を構えた兵士もいる。乗客が列をなしているところもあった。しばらく歩いて行くと階段はあったが、その前にも保安検査場がある。

六頁

「いや、この保安検査場は入構用だろう。場所がちがうんじゃないかな。」
僕が訊くと木村氏もちょっと困ったようだった。女学生のBさんが体調が悪いらしくふらふらしている。
そこに保安検査場のそばにいた小柄な男がやってきた。保安検査場にかかわる人間かもしれない。そういう雰囲気を持った男だった。
「どうしたんだい」
「いや、向こうに抜けようと思ってね。連絡通路は何処にあるかな。」
木村氏が答える。
「向こうに抜けるだって？」
「そうだよ、ホテルはあっちだからね。」
「ホテルはどこだい？」
「ホテル・シェルトンだ。」
「あっちはダメだよ。暴動があってね、その地域一帯が閉鎖されている。死人も何人か出ているから、危険な状態だ。」
「おいおい、どうなってんだ？」
僕は木村氏の顔を見た。そう言えば学生からの「暴動があってるみたいっすよ」というメールが脳裏に浮かんだ。男は戸惑っている僕らの様子を案じるように言った。

七頁

「ホテルがそっちかい。それはお気の毒だホテルはみんな宿泊禁止だ。」

八頁

「えっ！なんてこった。」
動揺が走った。
「ところで、連絡のつく携帯電話は持っているかい？」
「いや」
「どれどれ、ホテルの電話番号を見せてみな。」
男は自分の携帯に番号を打ち込む。やがて向こうとなにやら話した後、電話を木村氏にまわした。
「もしもし、ホテル・シェルトン？僕は予約している木村だが、どうなってるんだ？えっ？エリアー帯が閉鎖？死者は？ふむふむ、そうかい。えっ？ああそう。うーむ、そうかね。」
電話のやりとりから察するに、ホテルのある一帯のエリアは閉鎖されていて、宿泊はもちろん、そこに入ることもできないらしい。
振り向くとBさんはしゃがみ込んでいる。一刻も次の対応を考えないとBさんの体調も気になる。男は我々の難渋ぶりを見て言った。
「こう言うのも何だが、こっち側でホテルを探しちゃどうだい？」
その時、木村氏が自分の携帯を取りだした。
「ちょっと代理店と連絡を取ってみる。」

木村氏が携帯を手に取り番号の検索を始めると、男が言った。
「リクシャに新しいホテルを訊くがいいよ。」
その時、木村氏は電話をしまうと
「行くぞ」と駅舎の外に出た。我々も続く。男はおろおろついてきたが、それを振り切ってわれわれは外に出た。そこにはやはり階段があり、保安検査場がある。みかけは連絡通路だ。木村氏が保安検査場の検査機に荷物を放り込む。
「そっちに行くのか。」
疑心暗鬼で後に続いた。
なんてことはない。保安検査場を通り抜けて、階段を上るとそこは連絡通路だった。それを抜けるとそこはふつうに街であった。脳裏にたたき込んでいた地図を思い出す。
「おっ、あの通りだな。」
「そう、そっちです。」
木村氏は自信満々で歩き始めた。確かに暴動でもあったかのような乱雑さではあるが、それは「日本なら…」という前置きがつく。「インドなら…」と考えれば、コルカタと変わらぬ街並みだ。いや、コルカタより散らかし方が大胆と言えば大胆だが。
「あれですよ。」

三〇〇メートルくらい先をさして木村氏が叫んだ。SHELTONの看板が見える。
少し元気が出てきた。街は平穏である。ホテルに入った。閉鎖どころかフロントはのんびりと対応しているし、ロビーには眠そうな観光客がくつろいでいた。
なんてことはない。あの二人はグルでわれわれをそっくり別のホテルに押し込もうという算段だったらしい。

追伸

昨日、インドから帰った。デリー発夜九時一五分の飛行機で、成田着が八時だ。インドではほぼ全員が何らかのダメージを受けていた。インド慣れしているリーダーの木村氏ですら最後の日には車酔いで嘔吐してしまったくらいだ。最初におなかを壊したMさんはガンジス河畔アルカホテルのホットレモンで恢復。以後彼女は立ち直り、最後は元気でゴールした。

僕は途中何の問題もなく帰りの便に乗ったのだ。夕食を摂る時間がなかったので機内食が待ち遠しく、これはぺろりと平らげた。が、しかし、深夜、気分の悪い状態になって目が覚めた。子どもの頃に貧血を起こしたのと似た気分の悪さで、それが内臓にも来ているという感じだ。それでトイレに行ったら案の定ではあったが出し切るとだいぶすっきりして朝を迎えることが出来た。尤も、狭いエコノミークラスは寝苦しくて身体はしんどかったが、その所為だけでもない。朝食の果実は美味しかったがクロワッサンには手をつけられなかった。食欲がなくなっていたのだ。

成田には定刻よりずっと早く着いた。みんなと別れたとき、多少の疲れは残っていたが、ともかく日本に着いたので一安心である。国内線乗り換えにとことこ歩いて行く。そうしたら次第に疲労感がのしかかってきた。「さあ、福岡

便だ！」と思ったら何と〈福岡便は第一ターミナルに変更になりました〉との掲示があったので慌てて走った。走っても第一ターミナルとやらは見当たらない。で、案内のお姉さんに訊いた。

「八番から連絡バスが出てます」

再び階下に向かって走った。しかし、何処にバス停があるのかわからない。ちょうど案内カウンターがあったのでそこのお姉さんに訊く。

「すぐその先を出てごらん、きっと見つかるよ」

と教えてくれた。ちょうどバスが来たところだったので、飛び乗った。また、疲労感がずしっとのしかかってきた。第一ターミナルといってもよくわからないが、走っているうちにもよおしてきた。福岡行きのゲートが見えてきたところでかなりきつくなってきた。すかさずトイレに直行する。身体がどんどんつらくなっているのがわかる。旨そうな立ち食いそばが開店しているが、食欲は全くない。夜中の機内食までは食欲があったのに。

取り敢えず水分を摂らねば、とまずは野菜ジュースを買って飲む。記録をノートにしたためようかと思うには思ったが、何かをするという活力が出てこない。テレビで東京マラソンが始まった。売店でお茶を買い、それを飲みながら観戦することにした。

「おや？」

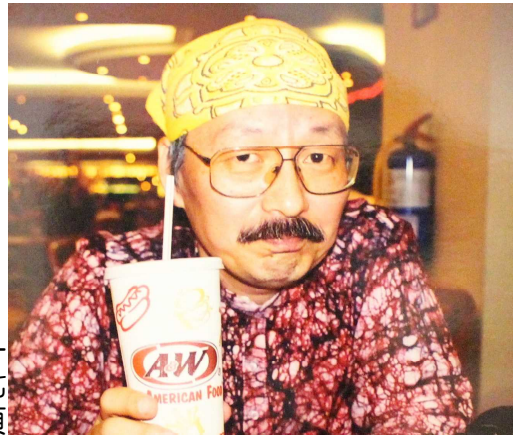
テレビに映った人影に見覚えがあった。
「まさか」
とは思ったが、それは一瞬のことで確かめることは叶わなかった。予定通り登場する。コードシェア便なのでスターフライヤーの機にＡＮＡの冊子が入っている。空いているので三列の座席に僕一人であった。それで誰もはばかることなく眠ることが出来た。
「操縦席でなんたらに異常が見つかったのでしばしお待ち下さい」
ＣＡのアナウンスを聴いて「あらら、旅は家に着くまで終わらないか」と思いつつ、再び居眠りに没頭した。眠るといっても、うたた寝のようなものだからたいして効果はないのだろうが、それでもずいぶんちがう。
一時間ほどして再びアナウンスがあった。
「異常が治らないので、この機は欠航にします。で、福岡行きは夕方までないので、羽田発一四時の便を取ってます。羽田には連絡バスで移動していただきます。ということで羽だ〝での乗り換えのチケットとバスのチケットと昼飯代として一〇〇〇円お渡しします。」
ええーっ！何てこった。この上移動かよ。ともかく機を降りる。降りるときにＣＡから欠航セット（写真参照）をいただく。ＣＡの方はとても恐縮しているようでかわいそうだったが、「ここに来てこれかよぅ！」というのが実感で

あった。草臥れ果てた身体に残るは気力だけだったが、それもいつ途切れるかわからなかった。
バスは一一時五〇分発となっていた。目の前を行く女性のグループがなにやら語っている。
「一一時半のが間に合うかもしれないわ」
「そうね、訊いてみましょう。変えられるかもしれない。」
一階に降りた。女性グループは少し先のカウンターに駆け寄っている。僕は躊躇わず外に出てバス停を目指し、そこにいる係員に問うた。
「突然欠航になって、羽田に行けと言われてこの切符をもらったが三〇分のに変更できないか。」
「何人ですか？」
「一人げな」
「それなら出来ますよ」
係員は切符を受け取ると半券部分の50分に斜線を引き、三〇分と書き加え、「列の後ろに並んで下さい」と指図して返してくれた。まもなく同じ欠航便の客が僕の周辺にあらわれた。係員が不審に思ったか、やってくる。
「三〇分のに変えられますか？」
「定員までは何とかなりますが、変えたい方は何人いますか？」

「私達は変えたから」
さっきの女性グループだ。
「僕は変えてもらったので」
と呟いて堂々と最後尾の最前列に並んだ。バスの中でも寝た。気力だけが頼りだ。生き抜くためにも気力で寝た。眠ることで体力を回復することを考えた。東京マラソンが行われていることがなぜか脳裏に浮かんだ。
「やつも苦しさと闘っているのだろう」
羽田に着いた。しかし、何処にどう行けばいいのかわからないもらった振り替え便案内にはヒマワリの図が描かれていて、「このヒマワリの裏の二次元バーコードを保安検査場、搭乗口でタッチ」と記されている。疲れているのだろう、判断が出来ない。裏には写真のようにバーコードなど書いていないのだ。
そのまま保安検査場に行き係員に問う。
「欠航の振り替え便なんだけど」
「これはね振り替えの案内で、あっちの振り替え手続きのカウンターで手続きをしないとダメよ」
と、けんもほろろに追い返された。とほほの感覚で戻りそのあたりの列に並ぶ。なにしろ振り替え手続きのカウンターなんぞは存在しないのだ。ただ、搭乗手続きとあるのでそれでいいかと結構長い列に並んだ。不安が押し寄せてく

る。なぜなら個々のカウンターには国際線乗り換えとか書いてあるからだ。ちょっと不満感も台頭してきた。何とか自分の番が来たとき、手を振って読んでくれたカウンターはそれではなかった。係のお姐さんは親切だった。
「早くお乗りになるなら、一三時二〇分発スターフライヤーと一三時二五分発のANAがありますが、到着するのはANAが先ですけど、どちらにしますか?」
「早く着きたいので」
「じゃ、ＡＮＡにしますね。すぐに六五番ゲートから出ますから、急いでこっちの保安検査場を通って下さい。」
と右側の検査場を指差してくれた。僕は「ありがとう」と言うと、慌てて保安検査場に向かった。今になって思うと、係員は「すぐに六五番ゲートがあってそこから出ますから、こっちの保安検査場を通って下さい。」と言ったのだと思う。なぜなら保安検査場を出たところに六五番ゲートはあったし、少しではあったが、椅子にすわって待つ余裕もあったからだ。おそらく集中力も落ちていたのだろう。
福岡には予定通りについた。タクシーを飛ばして大学に向かう。研究室でスーツに着替え、メールをチェックし、車のキーをポケットに入れて帰途についた。
夕食はそばを少し食べた。食べられるようにはなったが、そのまま寝ること

にした。夜中まで爆睡する。喉が渇いて目が覚めたが、気分はだいぶすっきりしてきた。再び朝まで眠る。食欲は少し出てきたがパンには手が出なかった。午前中は写真の整理をしてつぶし、うどんを一杯いただいた。

午後は休呆堂で過ごしたが、そこでのトラブルはまた別便で。体力は回復したし、食欲は出てきた。しかし、下痢は続いている。おやすみなさい。

インドの建築物はタフなのに。